

戦後80周年を迎えて——

～語りべ・福居さんが伝えたいこと～

令和7年は戦後80年という節目の年です。

全国で310万人、志木市でも、270人もの命が戦争によって奪われました。

戦争の記憶を風化させないためにもその悲惨さを後世に伝えていかなければなりません。

現在、(一財)埼玉県遺族連合会副会長や志木市遺族会会長を担い、戦争を経験した語りべとして市内小中学校で戦争の悲惨さや当時の暮らしなどを語り継ぐ福居^{ふくい かずお}一夫さんに話を伺いました。

平和の尊さについて、改めて考えてみませんか。

問合せ／生活援護課 ☎048 (473) 1427

はじめに

福居さんは、学校などで戦争体験を語る「平和の語りべ」として活動されています。その活動の中で印象的だったのは、ある学生とのやりとりだったと言います。

「どこで戦争したの？どっちが勝ったの？」と聞かれて、戦争のことをまったく知らないんだと実感しました。でも、戦後生まれが90%を占める今はそれが現実なんです。だからこそ、戦争の悲惨さと平和の尊さを伝えるために語りべが大事なんですよ。戦争を経験した語りべたちはもう高齢になっていて、これから先はどんどん話せる人が減って

いく。令和5年になってから語りべを育てようという話が国からいよいよ本格的になってきたので、より多くの人に広がればと思いますね。」と福居さんは語ります。

志木市内の語りべの人数

年度	人数
平成27年度(戦後70年)	8人
令和2年度(戦後75年)	4人
令和7年度(戦後80年)	1人

2歳で父との別れ

——戦争のことで特に印象に残っていることはなんですか？

父が出征するときの写真です。当時私は2歳でしたが、これが父との最後の時間になりました。普通は軍服で行くものなだけけど、うちは羽織袴^{はかま}だったんです。珍しいでしょ。当時、臨時召集令状(赤紙)がきていたのは30歳前後の人がほとんどだったんだけど、父は30代半ばでした。それでも徴兵されました。結果、父は帰ってこず、硫黄島で戦死したことが、しばらく経ってから分かりました。また、犬も飼っていましたが、空襲の際、吠えたり暴れたりする恐れがあったため毒薬を打って処分されるなど、何の罪もない動物までもが犠牲となったのです。

——空襲の被害も受けたのでしょうか？

当時4～5歳の私がいた浅草の近くにはコンクリートでできた都電の倉庫があって、そこに逃げて命拾いしました。空襲による竜巻のような劫火^{ごうか}が近くの言問橋^{こといばし}を襲い、多くの人が隅田川に逃げ込みましたがほとんどの人が助からず命を落としてしまいました。

戦後の支えとなった母

——終戦後の生活も相当大変だったのでしょうか？

配給の時代は、食べ物だけでなく身に着ける物も不足していました。給食もなく、普段の食事は芋ごはんとすいとんが中心で、卵やりんごは病気になった時しか食べられませんでした。また、運動靴もなかったため、小学6年生の運動会では全員裸足でした。私はあるときケガをして、包帯を2～3か月巻いていましたが、栄養失調で薬もなく傷口が膿^うんでしまったこともありました。

——幼少期の中で、支えになった存在はなんですか？

母ですね。父がいなかったけれど、母は本当に立派に育ててくれました。私が寝るときはまだ仕事をしていて、起きた頃にはもう仕事に出ていて、母が寝ているところを見たことがありません。お母さんはいつ寝ているんだろうと思っていました。疲れていたにもかかわらず、私が暗い性格にならないよう、曲がらないよう、厳しくも明るく育ててくれた。今振り返っても、一番偉かったのは母ですね。

悲惨な記憶を後世につないでいく

——お父様が戦死された硫黄島へ行ったことがあるとお聞きました。

遺骨集めのため、遺族会で硫黄島へ20日ほど滞在しました。私が行ったときには、17体ほどの遺骨が発見されましたが、遺骨収集も手つかずのところばかりで、当時の戦車などもそのまま残っています。不発弾もあって爆発する危険もあるため、退避！という声が自衛隊員からかかることもありました。



▲父出征時、写真中央父の右脇で座る。当時2歳11か月



▲臨時召集令状(赤紙)



▲1952年志木小学校運動会。当時小学6年生



▲硫黄島に残ったままの戦車

——いまだにそれほど遺骨が発見されることに驚きました。

東京都小笠原村でありながらまだ1万體以上の遺骨が眠ったままです。1日でも早く本土に帰さなくてはなりません。それが終わるまでは戦争が終わったとはいえません。

——語りべの継承については、どのように考えていますか？

実際に戦争を体験している世代は年齢的に限界に近いです。戦争を体験していない世代でも語り継いでいくことが必要だと思います。映像でも、本でも、広島などの現地に行き得た体験でもいいから、自分の言葉で伝えていく。そうして語り継がれていけばいいと思います。

——最後に語りべとしてメッセージをお願いします。

戦争を知らない世代が増える中で、過去の悲惨な記憶をどう伝えていくかが大切です。私は命の重さや平和のありがたさを語り、次の世代へ伝えていかなければなりません。子どもたちはきちんと話せば理解してくれます。その子どもたちを含めて次の世代は自分の言葉で語っていくことが、命をつないできた人々への最大の恩返しであり、平和を守る力になると思います。戦争の記憶をただの昔話にしないために、それぞれが与えられた役割をきちんと果たしていくことが、今を生きる責任だと思います。

おわりに

戦後80年が経過し、平和という言葉が当たり前になっている現在、誰もが願うその平和をこれからも守り続けていくために、戦争を経験していない私たちも戦争の悲惨さを今一度振り返り、学び、戦争の記憶を未来へとつないでいかなければなりません。



▲志木第二小学校で語りべ活動をする様子



▲志木第三小学校で語りべ活動をする様子

平和の語りべを聞いた子どもたちの感想(一部抜粋)

ぼくは、これ以上戦争が起こってほしくないです。起きたらまた多くの人が死に、多くの人が悲しむと思います。しかし、まだ戦争が続いている場所もあります。そこでもまだ多くの人が死んでいるということです。これから先、まだ戦争が起こるかもしれない状況で自分たちにできることは何かを考えていきたいと思います。

戦争経験のない私は具体的な話を聞くたびに戦争の恐ろしさが増します。今、おいしいご飯が食べられて、勉強ができて、友だちや家族と楽しくいられるのは「平和」のおかげだと思いました。戦争の惨劇が繰り返されることがないように次の世代の人にも戦争の恐ろしさを伝えていきたいです。

どうしてこんなに人が死ぬような戦争をしたのだろうと疑問に思いました。戦争を体験した人から、戦争の残酷さを聞き、日本が二度と戦争第一の道をいかないようにしたいです。戦争のために亡くなった人のことを考え、戦争のことを知り、聞いた話を次の世代の子どもに伝えたいなと思いました。そして、1日でも早く遺族の方に骨を届けてほしいと思いました。

戦争は絶対にやってはいけない。戦争を経験している人の話を聞いたのは、とても貴重なことだと思いました。何百万人の人が犠牲になり、そのうえで私たちは暮らしているのだと考えたら、もっとありがたみをもった方がいい。社会科でも戦争の勉強をしていくので、参考になりよかったです。

戦後80周年平和祈念事業を実施します

戦後80周年の節目にあたる令和7年に、風化しつつある戦争の体験を次の世代の子どもたちに引き継ぎ、多くの市民に戦争の悲惨さと平和の尊さを伝える祈念事業を実施します。

とき 11月22日(土) 10時30分～13時30分(予定) **ところ** 総合福祉センター

内容 福居さんによる平和の語りべ、小中学生による平和の作文コンクールの表彰式、パネル展示、戦時中の食事を再現した試食会など



軍服(上着)



軍靴とゲートル



カバン



防空用鉄かぶと



金属製弁当箱と水筒



防空ずきん



しゅりゅうだん
陶製手榴弾



やつきょう
薬莢入れと薬莢



飯ごう



大東亜戦争
割引国庫債券



アルミ製メガホン



昭和16年発行の教科書



砲弾

戦争の記憶を残す

問合せ／郷土資料館 ☎048(471)0573

郷土資料館では戦争にまつわる物品を収蔵しています。当時の「モノ」に触れることで、平和の大切さ、命の大切さを改めて実感できるのではないのでしょうか。